

中国における SRS 手術を受けたトランス女性の親子関係——

「受け容れ」をめぐる葛藤

呉 亦悦（北海道大学文学院）

1. 研究背景

日本において、トランスジェンダー当事者は多くの困難を抱え、とりわけ親との間で性自認の「受け容れ」をめぐる葛藤が深刻な課題となっている。（周司・高井 2023；石井 2018）。一方、中国においては、性別違和が現在も精神障害の一種として分類されており（中国卫生健康委員会 2020）、加えて、政府による法律、政策、メディア統制、宣伝活動がトランスジェンダーに対するスティグマを強化している。このような背景のもと、中国におけるトランスジェンダーの親子関係は、さらに深刻な葛藤を孕む傾向があると指摘されている（辛ほか 2017）。特にトランス女性に関しては、社会的偏見がより強く、親子間の対立や断絶が顕著に表出しやすい。そして、既存の研究においては、性別適合手術（SRS）を受けたトランス女性における親子関係の変化に関して、十分な検討がなされていない。

2. 研究目的

以上を踏まえ、本研究の目的は、中国において SRS 手術を受けたトランス女性を対象に、親との関係性、とりわけ親による「受け入れ」をめぐる葛藤の実態を明らかにすることにある。加えて、こうした葛藤が生じる要因を解明することを目的とする。

3. 研究方法

本研究は SNS を通じて SRS 手術を受けたトランス女性の協力者 7 人を募り、彼女らに対して半構造化インタビュー調査を行った。インタビュー調査の回数は 2～3 回であり、毎回の時間は 60～90 分程度である。

4. 結果

調査の結果によれば、SRS 手術を受けた後であっても、親による「受け入れ」は依然として困難であることが明らかとなった。7 名の調査対象者のうち、手術を契機として親の態度が「受け入れ」に転じたケースは 1 名にとどまった。また、調査対象者の中には、「SRS 手術を行えば親に受け入れてもらえる」と期待していた者もいたが、実際にはその期待とは逆の結果となったケースが多く見られた。さらに、SRS 手術を受けたことによって親子関係がより悪化し、最終的には親と絶縁するに至った事例も 3 名確認された。葛藤が生じる要因として、親が「知人や親戚に知られることで自らのメンツが損なわれる」と懸念すること、ならびに「息子であるはずの子どもが娘になる」という事実そのものを受け入れがたいと感じることが主な理由として浮かび上がった。

5. 考察

本研究は、SRS 手術後も親からの受容が困難であり、むしろ関係が悪化するケースがあることを明らかにした。調査対象者の中には、親から「君のその様子をちゃんと見てよ！どこが女らしいのか」といった叱責を受けたと語る者もあり、生殖器の変化のみではなく、外見的な「女らしさ」までが要求されていることが明らかになった。これは中国社会における厳格なジェンダー秩序の存在を示している。また、家族や地域社会の視線を強く意識する中国の「メンツ」文化も、トランス女性のアイデンティティ受容を妨げる要因となっており、儒教的家族観に基づく父性や息子継承の観念が、その否定的態度を強化している。

参考文献

石井由香里, 2018, 『トランスジェンダーと現代社会——多様化する性とあいまいな自己像をもつ人たちの生活世界』明石書店。

周司あきら・高井ゆと里, 2023, 『トランスジェンダー入門』集英社。

辛穎・齊霽・吳利娟, 2017, 『2017 中国跨性別群体生存现状调查报告』北京大学社会学系。

中国卫生健康委員会, 2020, 「成人人格和行为障碍」『精神障碍诊疗规范标准』, 386-88。

キーワード：SRS 手術を受けたトランス女性、親子関係、葛藤